

〇〇してみました世界のフィールド

聴導犬は人生のパートナー

い い ず み な お こ
飯泉 菜穂子
民博 人類基礎理論研究部



聴導犬について調べてみました
聴導犬の英語名称は「Hearing dog」(2016年)

今年の干支は「戌」。いぬは遠いむかしから、わたしたちの暮らしに役立つ忠実で頼りになる仲間だ。ペットとして飼われることが増えた現代の日本においても、その本来の性質を活かして活躍する盲導犬や介助犬などの補助犬がいる。年末年始展示イベント「いぬ」の開催にあわせて、まだあまり知られていない「聴導犬」の実際について調べてみた。

聴導犬とは

聴導犬は、聴覚障害者に生活上必要な音を教え音源へ誘導するよう訓練を受けた犬である。日本では一九八一年より育成の試みがスタートした。現在では、視覚障害者の移動をサポートする盲導犬、肢体不自由者の日常生活動作をサポートする介助犬とともに、二〇二



犬種指定はなく、保護犬等のなかから適性のある犬を選定・訓練する(2017年)

年に施行された身体障害者補助犬法に基づき訓練・認定されており、二〇一七年二月時点で、全国で七一頭の聴導犬が実働している。候補犬の多くがいわゆる保護犬である。犬種に特に指定はなく、実働している聴導犬には小型犬も大型犬もいる。現在では、候補犬は二年ほど育成機関(全国に約二〇の機関がある)の訓練士が自宅で飼いながらつけた後で希望者(ユーザー)と引き合わせ、合同訓練のちに引き渡し、認定試験合格後に聴導犬となるのが一般的であるが、ユーザーの飼いたい犬を訓練して聴導犬とするケースもある。

音を教える

聴導犬の主たる役割は聴覚障害者には聞こえない「音」をユーザーに教える(音がしていることを伝え必要に応じて音源まで導く)ことである。すべての音ということではなく、「事前に訓練を受けている音」を教える。どんな音を事前に訓練するのかについては、ユーザーのニーズに基づいてカスタマイズする。

代表的なのは玄関のチャイム音、電話の呼び出し音、火災報知器の



聴導犬について知ってもらうための講座での様子。前足でユーザーの足に触れ音の発生を知らせる(2017年)

日本 ★

の音を聞いてもユーザーに教えることはしない。ユーザーの生活や職業に特化した音(例えば職場が学校である場合、授業開始・終了時のチャイムなど)も訓練を受けていけば教えるに来る。

その他の訓練を受けていない音(人や車が近付いてくる音や雷や強い風等の自然音、テレビの音量など)は教える対象ではないが、聴導犬が普通に「反応」することで、ユーザーが状況を確認する手がかりになることも多い。

また、聴覚障害は、一見ただけではそうとはわかりにくいのがひとつの特徴であるが、聴導犬は(試験に合格した証である)「聴導犬」と書かれたケープを着用しているため、ユーザーの聴覚障害を周りに



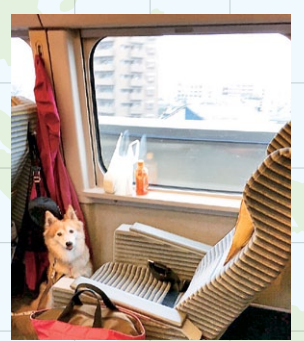
ユーザーが会議や食事をしているあいだは待機する(2017年)

聴導犬は体の一部

聴導犬は身体障害者補助犬法によって公共施設や交通機関、飲食店、病院、従業員五〇人以上の職場などへの同伴受け入れを拒んではならないとされている。ユーザー側にも、ユーザーと補助犬は厚生労働大臣の指定法人で認定を受けること、ユーザーは補助犬の衛生や健康、行動について管理することなどの義務が課せられている。しかし、法の施行から一五年が経過しているにもかかわらず、飲食店への同伴拒否などの実例はまだ多く、ユーザーや育成機関が、聴導犬への理解を社会に広めるための広報活動に力を注いでいる。

ユーザーにとって聴導犬は人生のパートナーであり、耳の代わり・身体の一部である。聴覚障害者が社会活動をおこなうための「生きた補装具」と表現するユーザーもいるほどで、聴導犬を拒否されるということとは自分自身を拒否されたことになるといえる。

犬の寿命は人間よりも短く、どこかの時点で聴導犬を引退する日が来る。引退後は、ユーザー宅でペット犬として余生を送るケースが九割近いということだ。二代目、三代目の聴導犬を選ぶ際にも、先代と同居することを前提に相性に配慮するという。ペット禁止のマンション住まい(聴導犬は身体障害者補助犬であるため例外となる)では引退後に一緒に暮らすことができないため引越しをするユーザーもいるとのこと。聴導犬とユーザーの絆の深さを感じるエピソードである。



ユーザーの外出にももちろん同行する(2016年)

「見える化」するという役割も担っている。多くのユーザーが聴導犬を伴っていたおかげで、列車が止まってしまった際の緊急アナウンスを居合わせた方に筆談してもらえた……というような経験をもっている。

年末年始展示イベント「いぬ」 会期：1月30日(火)まで 会場：本館展示場 ナビひろば